

五體墨場必携

國

特257

POP

57

460

10
1 2 3 4 5 6 7 8 9 40
1 2 3 4 5

始



特 257
909



辻本史邑書

[縮冊版]

墨場火携

駿堂發行



國光

金尊酒

吉德

凌雲氣

淡遠

石爲身

國
父
全
儕
昌
吉
德
凌
雲
氣
淡
遠
石
爲
身

游神

和樂全

廉平

仁而成

游神和樂全

無我 大德庸

幽雅 南山壽

寐我 人鬼日留

幽雅 南山壽

清恬 德不孤

靜觀 嶺上雲

清恬 德不孤

靜觀 嶺上雲

毒雲 水竹居

毒雲 水竹居

羈繩 四時樂

真靜 春可樂

松濤 占靜恬

汲古 雲外賞

清先 山色佳

汲古 雲外賞

松濤 占靜恬

真靜 春可樂

靜和 四時樂

清真 山色佳

惠和 敬天法

慶新

間有趣

甲 鼎

龍天懸

宏達 敷和氣

薰新

閉有趣

宏達

敷和氣

雅通 松竹處

采美 淡若水

淡若水

雅通

松竹處

無念 天益壽

天益壽

雲臥 學遜志

學遜志

豐樂 雲從龍

雲從龍

貞壽 松篁健

松篁健

汲古 讀書樂

二言、三言句

五

四

無我 獻至尊

流慶 達心志

玄會 祚百世

道味順乃祥

達心生而熟

流慶 達心志
玄會 祚百世

象鼻呈珠

道味順乃祥

達心生而熟

聖猶不外徵

護蘭守清虛

致寬思無邪

餘樂嚴內外

殊也苦青山

聖道天行道

護蘭守清虛

致寬思無邪

餘樂嚴內外

殊也苦青山

勝遊

對青山

餘樂

嚴內外

致寬

思無邪

護蘭

守清虛

聖猶

不外徵

聖猶不外徵
護蘭守清虛
致寬思無邪
餘樂嚴內外
殊也苦青山

學古 騣三古法一

古處 謹勝ノ禍

闡凸 由凸ノ穀

古處 謹勝ノ禍

守中 詩酒窠

妍和 守勝難
家美 左臣逐

樂只 春德風

樂只 春德風

樂只 春德風

樂只 春德風

廣敬 和致芳

質厚 日間曠

優妙 慎交遊

福壽無窮

師範難留

恭默思道

仁遠乎哉

仁遠乎哉

天和將至

天和將至

清氣入骨

子孫永寶

予豫兆甯

天氣清和

天氣清龢

雲高氣靜

雲高氣靜

竹柏勁心

竹柏勁心

月淡烟沈

月淡烟沈

善在尊師

龜十德師

外寬內明

道法自然

逸情遠性

逸情遠性

貞風凌俗

貞風凌俗

上智不惑

二哲不惑

福生積善

福生積善

玉樹青葱

玉樹青葱

蘭秀芝英

蘭秀芝英

萬古清風

萬古清風

玄酒一章

廿酉一鴟

山趣水情

山趣水情

水遠山長

水遠山長

心間意適

心間意適

月白風清

月白風清

天命維新

天令維新

清風戒寒

清風戒寒

溫故知新

溫故知新

心廣體胖

心廣體胖

知足者富

知足者富

內外一家

見可而進

外發英華

漸近自然

外發英華

漸近自然

和神養素

治生立命

玄對山水

道義之門

閑思清話
詩書自娛

衡坐太令
玄對山川
道義之門

純孝格天

問中至樂

問情淡遠

幽意閑情

花隱四時

閣中至樂
間情淡遠
幽意閑情
花隱四時

年月有吉

江山清趣

采菊有吉

江山清趣

菊有精神

清氣入骨

秋物感人

行嘉王吉

六哲王吉

露白風清

露白風清

思逸神超

思逸神超

村情山趣

都情山趣

幽人妙韻

玉人妙韻

大公無我

大台驟殘

氣豪心果

氣豪心果

天和將至

天和將至

欣游暢神

欣游暢神

清寂養和

清寧養和

至德在人

至德杜入

雲遊霞宿

雲遊霞宿

翰逸神飛

翰逸神飛

尋水望山

尋水望山

風月主人

風月主人

靜夜明月

靜夜明月

治心保靜

治心保靜

時和筆調

時和筆調

寓意琴書

寓意琴書

動與神合

動與神合

寒山夜鐘

厭修乃來

兄弟致美

天光雲彩

文史縱橫

兄弟致美

天光雲彩

文史縱橫

德唯取友

爲善最樂

至誠無息

蘭有國香

上嘉如水

窮愁嗟白羽

爲善寡歡樂

至誠無息

蘭有國香

上善山水

皇祖其多福

樂志一家春

堂祖奠多師

逸事風塵外

天開萬國歡

逸事風塵外

春風秀芳草

春風秀芳草

大同初不易

松攀伴鶴飛

三陽開景運

四海生春風

瑞氣滿梅花

作文能避俗

止父劍歸俗

白雲抱幽石

白雲抱幽石

大德不踰閑

大德不踰閑

金聲而玉振

金聲而玉振

麗日發光華

麗日發光華

大智亦猶人

大智亦猶人

青松多壽色

青松多壽色

間居多幽事

間居多幽事

山靜似太古

山靜似太古

琴興在花村

琴興在花村

靜中觀物化

輪臺伴清閑

寒巖一樹松

龍門作大文
翰墨伴清閑
寒巖一樹松

松風有清音

松風有清音

永壽三乎頌

仙家樂事濃

人生行樂耳

春樹萬家烟

心足身常閑

眉壽永萬年

鸞鳳鳴九霄

看花選石眠

看攀選石眠

虛齋山字屏

虛齋山字屏

天地一家春

天地一家春

鶴宿千年松

鶴宿千年松

君子有三畏

君子有三博

雲開萬岳春

雲開萬岳春

山遙不斷雲

山遙不斷雲

千峯黃葉村

千峯黃葉村

竹翠淨琴書

竹翠淨琴書

大節謹終始

大即蒸八紳

春風生福壽

春風生福壽

太和呈景運

風琴萬壑松

太和呈景運

風清人倚樓

風清人倚樓

作室追綠野

止窟彊索畎

融風拂晨宵

融風拂晨宵

新篁動清節

新篁動清節

清風九霄鶴

清風九霄鶴

山月夜窓寒

山月夜窓寒

新篁動清節

新篁動清節

融風拂晨宵

融風拂晨宵

清風九霄鶴

清風九霄鶴

予聚百采龕

味淡有真樂

幽閑少是非

靜與世相忘

幽閑少是非
靜與世相忘

山石老性生

幽居養性真

對月惟古入

對刃逐古入

晴窓靜繙書

晴窗靜繙書

圖書時自娛

圖書時自娛

境靜意自適

境靜意自適

心逸忘事理

心逸忘事理

即支々線古A

清坐契心賞

惡盈而好謙

德厚者流光

妙言無古今ニ

妙言無古今ニ

萬全求國事
體常而盡變

物華初煥發

翼全求國事

體常而盡變

物華初煥發

晨風扇激和

萬國度皇風

萬國度皇風

玄門天中天

8 門天東天

晴靄動昌辰

晴靄動昌辰

百事樂嘉辰

百事樂嘉辰

詠歌際昇平

詠歌際昇平

風助竹聲寒

風助竹聲寒

出家尊三寶

出家尊三寶

賀扇動清風

賀扇動清風

槐夏午風清

槐夏午風清

熱散由心靜

熱散由心靜

茂木脩清泉

田寧用事魚入利

松下玉琴邀鶴聽

松下玉琴邀鶴聽

蓬山樓閣五雲深

秀色臨南萬歲山

一日清閑一日福

蓬山樓閣五雲深

秀色臨南萬歲山

一日清閑一日福

文昭武穆嚴祀事

殘樹烟凝秋草碧

殘樹烟凝秋草碧

溪光山影動浮虛

半峯花雨一聲鶯

春江兩岸百花深

今人共仰三王畫

白丁氣効三王畫會

詩卷長留天地間

詩卷長留天地間

風吹桃李一園香

風吹桃李一園香

老去詩篇渾漫興

老去詩篇渾漫興

獨樹花發自分明

獨樹花發自分明

武寧服膺孫武子

或嘗取法無殊政子

窓中早月當琴榻

窗中早月當琴榻

長松下當有清風

長松下當有清風

萬里寒光生積雪

萬里寒光生積雪

一年風月可烹茶

一年風月可烹茶

一竿風月屬閑身

萬年永寶勒成レ書

翼外非廟勒成書
雲山相對一床書

處士風流水石間

處士風流水石間

江都清境皆畫本

五粒松間白鶴眠

新成朱子治家書

性石枯藤多古意

樂事還來花下詩

野草幽花各自香

梅花燒屋香成海

憇々一尊寮友酒

飄飄有伊洛間意

亾亾一簷寥寂羽西
飄飄有伊洛間意

酒近南山一作毒杯

烟雲凝而暮山紫
酒近南山作壽杯

一方明月可中庭
一方明月可中庭

參玄靜對黃庭經

亂紅遮斷松邊屋

夢心靜對黃庭經
亂紅遮斷松邊屋

窓近花陰筆硯香

窗近花陰筆硯香

一簷新月半欄花

一簷新月半欄花

人立柳花月正方

人立柳花月正方

大孝不惟事顯揚

大孝不爲事顯揚

相逢但祝新正壽

相逢但祝新正壽

一分春色太平多

一分春色太平多

一朶荷花滿院香

一朶荷花滿院香

開花原是落花風

開花原是落花風

新月中生即在天

新月初生即在天

竹窓深處課兒詩

竹窓深處課兒詩

吟苦樓前有月知

吟苦樓前有月知

鶴叫一聲天欲秋

鶴叫一聲天欲秋

一朶孤鶴破空初

一朶孤鶴破空初

天德遠能周三四野

不得備備解用三楚

自占一溪雲水居

自占一溪雲水居

山窓無月一燈明

山窓無月一燈明

燈花半落生三夜寒

燈花半落生三夜寒

月明黃鶴下三芝田

月明黃鶴下三芝田

萬家子女得三天和一

翼室早中星不滿

釣竿漁艇足生涯

釣竿漁艇足生涯

芸窗霧冷文書靜

芸窗霧冷文書靜

白首殘編萬古心

白首殘編萬古心

縱橫一葉拂千軍

縱橫一葉拂千軍

天德在三四子六經一

不德社三予介翌

五十四

獨倚衡門看遠山一

獨倚衡門看遠山

微名身後酒生前

微名身後酒生前

滿面松花落晚風一

滿面松花落晚風

燈花半落生夜寒一

燈花半落生夜寒

我宗入二相三辟一

我宗入二相三辟

筆華開處墨華濃一

筆華開處墨華濃

人在讀書深處樂一

人在讀書深處樂

始知烟月足家園一

始知烟月足家園

無邊樂事歸吟筆一

無邊樂事歸吟筆

七言句

五十五

人室門里夥學書

蒼茫黛色晴山曉
着茫茫色晴山曉

一枕邯鄲別有天

一枕邯鄲別有天
笛倚風簷月一鉤

春風吹夢到地塘
笛倚風簷月一鉤

十日自用蠶叢書
在庭官尹處茶事

書畫琴棋詩酒學

琴榻書床識靜機

樹影參差月半床

綠窓空教水枕飄

「毒考萬年周各頤，
室家永寶子孫書」

齋房翼外周魯辟邵廬

亥牘寶予雅書

「自喜軒窓無俗韵、
亦知真木有真香」

自喜軒窗無俗韵亦
知真木有真香
邪正者治亂之本賞
罰者治亂之具

「邪正者治亂之本、
賞罰者治亂之具」

「一簾疏雨琴書潤、
滿坐清風枕簟涼」

一簾疏雨琴書潤淌
時清風枕簟涼

「滿樹丹青隨物換、
平生富貴逐春來」

滿樹丹青隨物換
平生富貴逐春來

「酒對一尊懷二我友
花明四壁是君家」

西對一鳩龠我羽築

卽三呼是君穴

自愛安閑忘寂寞天

將強健報清貧

地占百弓多是水樓

「自愛安閑忘寂寞、
天將強健報清貧」

「地占三百弓多是水、
樓無一面不當山」

無一面不當山

無窮興味閑中得
強半光陰醉裡消

半光陰醉裡消

平生心事琴三疋
未路人情酒一中

該人情酒一中

「四方齊馬用二金勒，一

三才寶鏡全劍

村
AD
茶
葉
王
子

音連
山山
羔
株
露路
△
山

「香逕草荒秋露白、
山村雨過暮烟青」

半
溪
淺
碧
春
前
雨
滿
鄉
雨
過
暮
烟
青

「半溪淺碧春前雨、
滿地殘花午後風」

「露引二松香，來二酒盡，一雨催三花氣，潤三吟箋。」

醉
了
才
想
念
你
的
笑
聲
和
你
的
氣
氛
和
你
的
花
香
和
你
的
人

也
殘
花
牛
後
風

稀石竹
山色秋
生林

也回之向舊城

「事有^二是非^一明以智、
位無^二大小^一在^二于勤^一」

六十四

萬物是非^一明^二也^一哲士

辦^大^八^十^于景^大

積雪樓臺增壯觀、
近^一春鳥雀有^二和聲^一

春鳥雀有^二和聲^一

靜中見得天機妙、
閑裡回觀世路難

裡田觀世路難

天懸海外三千界、
月滿人間幾百州

滿人間幾百州

一川水盡王摩詮、
十里鶯花杜牧之

望鶯花杜牧之

「一川水盡王摩詮、
十里鶯花杜牧之」

烈々桓々奄乃武、
彬々穆々咸宜文」

剝剝鼈鼈龜龜入走鼈
鼈鼈鼈咸鼈

「萬物靜觀皆自得、
四時佳興與人同」

萬物靜觀皆自得 四
時佳興與人同

「露白秋江鷗一夢、
月明寒樹鴈雙歸」

露白秋江鷗一夢月

明寒樹鴈雙歸

數竿脩竹三間屋、
幾樹閑花一小園

樹閑花一小園

幽禽不見但聞語、
野草無名都著花

茅堂名放翁庄

「敷」詞妄作大人賦、

厭世靜參般若經」

重翻中止人不賢肢

山窮水盡處而至

重翻中止人不賢肢

「庭有喬松三徑古、
門餘碧水一溪清」

庭有喬松三徑古門

餘碧水一溪清

「半園梧竹秋先到、
一榻琴書夢亦清」

半園梧竹秋先到一

榻琴書夢亦清

粗衣淡飯足安常、

「粗衣淡飯足安常、
養得浮生一世清」

得浮生一世杜

苦誤嘗因諒更紀一

累且向冥中覓

「萬誤曾因疎處一起、
一隅且向貧中覓」

「有々尊有々鼎乃家寶、
無々酒無々花是俗人」

育鷗育鼎了穿竈難

西辭來是俗人

「靜定工夫忙裡試、
和平氣象恕中看」

靜定工夫忙裡試和
平氣象恕中看

「心唯一正千官肅、
事不二多言萬物齊」

心唯一正千官肅事

不多言萬物齊

意在可兼差可處身

居才與不才間

松濤忽捲三更雨、
林鶯俄驚六月秋

猿猿急呼六月秋

「松濤忽捲三更雨、
林鶯俄驚六月秋」

「月到三中天，有三朋至，
日唯先甲享，三祖歸。」

刃對中不育氣，且曰

色光十全且歸

自有溪山真樂地，從來富貴是危機。

「話向禪中參冷淡，心於靜處息紛紜。
來富貴是危機，話向禪中參冷淡心。」

「話向禪中參冷淡，
心於靜處息紛紜。」

「太平世界豐登外，
小有洞天閑適中。」

於靜處息紛紜

太平世界豐登外，小

有洞天閑適中

「樂事每從忙裡過，
好花偏向雨中開。」

左偏向雨中開

「變生不_レ在_二黃天位、
治事無_ニ殊赤子誠」

爾生不十黃天立爾
當麻朱火多成

「富貴每因驕佚一敗、
貧窮半是惰情多」

富貴毎回驕佚敗貧
窮半是惰情多

「同窓共硯須謙讓、
立志存心互切磨」

同窓共硯須謙讓立
志存心互切磨

「得意好花開早落、
喚愁芳草燒還生」

得意好花開早落喚
愁芳草燒還生

「一片林塘詩境界、
四時花果隱生涯」

一片林塘詩境界四
時花果隱生涯

「玄天既變龍無首、

新龍始生月有眉」

8 天節雨事霖且新

霧紗紗坐羽衣簫

「今宵對雨娛殘歲、
明日逢人說去年」

令宵對雨娛殘歲明

日逢人說去年

「人情好惡花甘苦、
世事榮枯草長短」

人情好惡花甘苦世

事榮枯草長短

功名角上無多地風

月臺中自一天

功名角上無多地風

月臺中自一天

「詩書作我間中地、
風月知人醉裡天」

「田父有レ心成ニ萬實、
文家得レ用在ニ三冬」

田父有レ心成ニ萬實、
文家得レ用在ニ三冬」

寅見用十三人

「星從ニ河漢、淡中落、
秋在ニ梧桐、疎處多」

星從河漢淡中落秋

左梧桐疎處多

秋聲在樹疑天樂桂

「秋聲在レ樹疑ニ天樂、
桂子零レ空像ニ雨花ニ」

子零空像雨花

勤苦十年經子史風

千古畫待書

山色湖光設朝供、
竹影松陰生午涼」

移松陰生午涼

「勤苦十年經子史、
風流千古畫詩書」

「作レ聖之方惟業々、
自天賜福綏元々」

止聖止才多榮榮自

不^ノ福^ハ聯^ハ元^ハ

開門納月來萼景滴

露研朱傍桂陰

秋山破夢風生樹夜

「秋山破^レ夢風生^レ樹、
夜水明樓月在^レ湖」

「開^レ門納^レ月來^ニ花影、
滴^レ露研^レ朱傍^ニ桂陰」

忍寒賞竹憐高節臨
阻尋梅致好枝

立生石^ニ天^ニ水^ニ冰

「忍^レ寒賞^レ竹憐^ニ高節、
阻^レ尋^レ梅致^ニ好枝」

入魚^ニ鯉^ニ冬^ニ冰

「寒生^ニ鷹^ニ天^ニ將^ニ等、
冷入^ニ魚^ニ鯉^ニ水^ニ冰」

「西野民和山多壽、
萬家人靜日方中」

三 樅 甲 頤 山 多 壽 萬 人 靜 日 方 中

字 ト 鞍 曰 才 重

「詩書作我間中地、
風月知人醉裡天」

詩 書 作 我 間 中 地 風

月 知 人 醉 裡 天

「歲月消磨詩句裡、
河山浮動酒杯中」

歲 月 消 磨 詩 句 裡 河

山 浮 動 酒 杯 中

「人非本業皆無賴、
里有仁風即太和」

人 非 本 業 皆 無 賴 里

十

「凶レ危守レ節心無レ改、
忍レ死捐レ生志不レ移」

有 仁 風 即 太 和

一

死 捐 生 志 不 移

「夜寒休對中天月，
山靜原多四季花」

太白休對卓不勿山

蜀爾多三季寒

「清坐相看情不惡、
淡交至久味方真」

清堅相看情不惡淡

交至久味方真
丘壑自成安樂國漁

「岳壑自成安樂國、
漁樵尙有老成人」

樵尚有老成人

案頭黃卷香終日砌

下蒼苔雨一簷

欲雪無雲風力強
欲睡不睡寒夜長

惟石惟宜東

「考作『室子孫其嗣』」

王在位官尹允恭」

孝子室子孫其嗣
王在位官尹允恭

孝子室子孫其嗣
王在位官尹允恭

十立自羽明彞

儉于言可以養氣儉

于和可以獲福

明者遠見于未萌智

「明者遠見于未萌、
智者避危於無形」

「儉于言可以養氣、
儉于私可以獲福」

者避危於無形
雲歸時帶雨數點木
落又添山一峯

「雲歸時帶雨數點、
木落又添山一峯」

「但覺滿身皆雨露、
絕無一點著塵沙」

第一點著塵沙

「且對成王惟昭格，
尹事太甲其允終」

旦對成王奉節召尹

曾大廿廿

繞砌蘭苔照水盤

空秋隼景橫天

溫火試香刪舊譜汲

「繞砌蘭苔照水、
盤空秋隼影橫天」

「溫火試香刪舊譜、
汲泉煮茗續遺經」

泉煮茗續遺經

林泉茹飲貧無辱花

竹栽培靜有權

石柱晴因松露渴
茶烟遠趁竹風回

泊烹茗竹風回

「石柱晴因松露渴、
茶烟遠趁竹風回」

癸酉孟春書于寧
樂莊史道人



墨場必携の補遺

【三字書】

春

の

部

山朝龜百無壽慶春

秀野游事量無雲德

朗樂沼諸壽涯興風

(呂氏)
(潘岳)

春の風の美称である。又よき教化の意義、
めでたき雲が現れること。

いつまでも長いきする義。

つきない壽命。阿彌陀如來の異名。

多くのものごとが調和すること。

龜がぬまに遊びたわむれる義で、目出度いこ

朝廷や人民のよろこぶ義で上下樂むの意味。

山色が秀てほがらかなこと。

雪^ニ彰^ニ養^モ氷^ニ雪^ニ 菊^ニ月^ニ月^ニ天^ニ山^ニ菊^ニ

告^ハ嘉^ハ其^シ合^ハ先^ハに
冬^ニ花^レ送^レ可^モ如^シ色^ニ揚^ハ
の^ニ
豐^ニ瑞^ニ神^ニ潤^ニ花^ニ 壽^ニ涼^ニ玩^レ水^ニ健^ニ芳^ニ
部^ニ
(江總)
(朱超道)
(法天生念)
(玄宗)
(張說)

菊花の香氣を放つこと。
秋の山の形容に用ゆる言葉。
秋夜すみ渡りたる空を形容する言葉。
月を見て染むべき義。
秋の月の涼しさにいふ言葉。
九月九日に云ふ語。

春の花に先ち雪が花のやうに降る義。
氷が谷川にはりつめること。
其精神を發ひ培ふこと。
めでたきしるしを示す義。
大雪は豊年のしるしである意。

享^ニ 景^ニ風^ニ延^ニ好^ニ灌^ニ追^ニ志^ニ 養^テ壽^ジ として
の^ニ
夏^ニ 恬^ニ且^カ

秋^ニ 風^ニ洗^レ涼^ニ於^{ヨリ}清^{ナニ}涼^ニ欲^セ
の^ニ
星^ニ 靜^ニ水^ニ蒸^レ颸^ニ秋^ニ水^ニ風^ニ昌^ニ
部^ニ
(仲長統)
(陸凱蒙)
(黃正色)
(左傳)
福^ニ (曹株)
昌^ニ (郭經)
福^ニ (曹株)

長壽にして其上家の榮え盛になること
しづかに幸福を養ひ保つ意義。
其志は静かなるを欲する義。
涼しき風をたづねる意。
清き水にて洗ひすすきする義。
夏は秋よりもよい。
すゞしき風をひきよせる意。
風が夏のむしあつきを洗ひながす義。
南から吹いて来る風は涼しいこと。
命を司るといふ壽星に、ものをすすめて福壽
を新る。

春の部

四字書

身間淡思守清愛清全
樂是如入以而聞且其
逸寶雲立靜美靜儉長
(白樂天)
(杜牧)
(張丞羽)
(朽菴)

それへその長所をたもつこと。
清廉潔白でつゝまやかな意。
もの静かなるを好むこと。
きよくしてうつくしきこと。
心をもちまもるに静を以てすること。
思想の深くその理を究めること。
物事にあつさりして執着心のない意。
かんこそ自分の貴ぶ處である意。
身の安樂を喜ぶ意。

忍思仁和明學直恭
無而致則遜則
辱垢威芳誠志溫壽
(武王)
(書)
(楚辭)
(史紀)
(證苑)

恭敬なる人程長生きするといふ意。
すなほで大變おだやかなる意。
學問に志すものは常に恭謙であるべしとの意。
公正大なるものは自然に誠となる意。
温和なるは美德を招くもといなる意。
仁愛の心が深くて威儀のあること。
心中に少しのがれのない意。
物事に忍耐強ければ辱めを招くことがない意。

春の時候がちかくなつた義。

月蝕からだんく 明月となる義。

冬のさむき形容する言葉である。

天流櫛梅筍風樹雲流
 高秋螢髮潤老清陰聳金
 氣撲快入蘭引讀奇燥
 の 風浴長書神書峯石
 清（宋玉）
 部（林逋）
 （白樂天）
 （許敬宗）
 （魏伯起）

金や石をとかすやうな夏季の炎熱をいふ。
 夏の空の形容で、雪の色々な奇妙なる形を出
 現すこと。
 樹の陰のすゝしき處で書を読み夏を忘れる意
 風が氣持よく涼しく心をよき處にみちびくこ
 萄はすでにいびて竹となり、蘭は芽を出し長
 じて葉となる夏の候をいふ意。
 梅雨の濕気が書物に浸み入ること。
 頭髪をよく櫛きて湯に入り身體を清めること
 ほたるがりするといふ意味。

秋のふけたる時候を形容する意。

桃世鳥瑞發和延天蘭長和布
 李泰歌色詳神壽祿秀樂氣德
 妍時花含致養萬永芝萬致行
 豊舞春福素歲昌英年祥惠
 妍（左思）
 豊（漢玉銘）
 舞（揚巨源）
 春（玉右軍）
 福（歐陽永叔）
 素（賀敬之）
 歲（漢王充）
 昌（漢王充）
 英（漢王充）
 年（漢王充）
 祥（漢王充）
 惠（漢王充）
 （月令）
 （劉向）

喜徳を廣く敷き及ぼし、仁惠を遍く施すること。
 陰陽よく和するとさば必ず日出度ことが現は
 れる意。
 蘭に秀あり芝に英ありといふことで、誠にめ
 でたき意。
 天より與えられた幸福の永く續いてつきない
 こと。
 壽命の限りなく續くことを祝ひていふ言葉。
 精神をやはらげ志のかざりけないやう修養す
 ること。
 祥瑞を生んで幸福を招來すること。
 目出度き色が春を帶びてゐること。
 鳥が歌ひ花の咲き亂れる春のさかりを形容す
 る言葉。
 天下は良く治まつて時節は豊年であること。
 桃花や李花が咲きほこつて美を競ふ意。

映龍長江霜月天竹雲乾蓼
雪吹履冬山砧淡涼柏高坤風
讀鶴景清月烟人勁氣純葭
書語福沈健心靜和露
(易經) (崔駰) (吳融) (曹植)
(許慎) (劉蕡) (傅亮) (蔡邕)
(孫康) (周鼎) (白樂天) (文帝)

寬心守惇修雲霜玉嘉氣
仁莊命信德雜寒林松雪祚新
德體共明立氷雪常開日光
厚舒時義義清岫青花延照
(易經) (書經) (左傳) (昭明太子)
(朱長文) (方岳)

善行を修め義理を立てること。
信をあつくし實行して、義理を明らかにする
意。天命を守り保つには、時勢と共にせねばなら
ぬ。心がおこそかであれば、身体がのびくする
意。心が寛大にして仁徳のつみあつきこと。

氣清く新にして光り明かなること。
幸福の日にく加ること。
美しき雪が降り積り枯木に花をさかすさまを
いふ。松は霜がかゝつても永久に綠色を呈する事。
霜の降りた林、雪の積つた峰のことで、冬を
意味す。雲が寒うして氷の清く、はりつめたことで、
冬の寒さを現す。

暮に吹く風葦に置く露といふことで秋の意味
を現す。天地のやわらぐかたちないふ。
秋を形容する言葉で空はすみ渡つて高く空氣
は清くて静なること。心の強きことを現す、霜にたわま竹や柏の
強きこと。
月がうつすりと烟の中にかくれること。
霜清き夜の砧の音や月に吹く笛の聲といふこ
と、山や川の清きすがたないふ。

永久に大幸福を受くること。
龍がうそぶき、鶴がなくといふこと。
雪の光で讀書するということで勉學の意味。

萬佳春四黃淑和春東萬青和
 家氣雲海鳥氣輝風物陽風
 太滿五八話春作上一兆被
 平高色荒春風新早段光初八
 春堂開春深和年霞春輝正方
 (鄧虎文)

おだやかな風が國內に遍き渡ることで、平和
 を意味す。
 春の氣候がようやく初正を現したこと。
 春に陽をうけて宇宙總てのものが元氣附でき
 たこと。
 そよふく東風に、春が一段とこまやかになつ
 た。
 春の氣分が満ちて早く霞の雲がたなびいてき
 た。
 平和の氣が天下に満ちて新年をつくつてゐる
 よき春の氣候となつて吹く風も平和をさそつ
 てくる。
 鶯はここかしこに春のふけゆくなほなす事。
 國内津々浦々に到る迄春が満ち渡つてゐる。
 春の雲は五色の色を現はしてゐる。
 瑞氣が座敷中に満々としてゐる。
 萬戸に瑞氣溢れて大平の春をたたへてゐる。

仁
風
春
導
和

氣
(張華)

五
字
書

清廉心純含神治溫
 寂恥如孝經身慈
 養禮鐵至味智清惠
 和讓石敬道明素和
 (任昉)
 (王鑒)
 (柳儉)
 (程明道)
 (申屠嘉)

ものやさしく、あわれみ深くして、ものやは
 らかきこと。
 身を治むるに正しくして行ひの清廉潔白なる
 意。
 精神が清く智識盛にして知らぬことがない。
 聖人の教を心として斯道の奥をきわめる事。
 この上なき孝行と、この上なき敬の心の事、
 心の丈夫の意で、心の堅固なる鐵石のやうで
 あること。
 心いさぎよくて恥を知り、禮儀正しく人にへ
 りくだる意。
 静かなるうちにやはらかなる氣分を養ふ事。

秋鶴老菊開明山木菊雁
 高聲鶴花秋月秋葉爲唳
 佳秋萬令肇流菊動制風
 風更里人涼素葉秋頽雲の聲
 月高心壽風光香聲高涼
 (許澤) (西京記) (晋書)

松竹水
 秋部

雁がなき渡つて吹く風も秋空となつて來る。
 菊を愛するには老いやく年を止めるが爲である。
 木の葉は風に吹かれてさはーと秋の聲をしてゐる。
 山中秋階で、菊の葉までも香氣を放ちてゐる。
 あかるくさへた月光は地をらしてゐる。
 菊の花は人の命を長からしめるとの意。
 老いたる鶴はなほ千里をとぶ心があるといふ
 鶴の聲は高くなき渡り秋更にうけてきた。
 秋のふけ行くまゝに吹風も照る月もます／＼

游茂陽雨松暮清窓夏啓
 魚木暉收風局暑下風雲窓
 動俯爍花逼消澄有入多來
 緑清四竹枕長潭梧奇清の
 荷泉野涼寒夏月風竹峰風
 (王度) (陶淵明)
 (楊凌) (蘇東坡)
 (白樂天)

夏

部

窓を押し聞くと、夏のすゞしき風が吹いて來る。夏空の雲は種々な形をして現れる意。清々した涼しい風が、梧桐や修竹を吹いて來るの意。

池夏の時でも池沼に映る月影は、涼しく感ずる。大陽がきら／＼と四方の野をてらしてゐる。茂つてゐる夏の木立が清き泉に涼しき影をうつしてゐる。夏の雨が止んで、花や竹も一時に涼しい事。大陽がきら／＼と四方の野をてらしてゐる。池水にたわむれる魚は池の緑の蓮葉を動かしてゐる。風がなき渡つて吹く風も秋空となつて來る。菊を愛するには老いやく年を止めるが爲である。木の葉は風に吹かれてさはーと秋の聲をしてゐる。山中秋階で、菊の葉までも香氣を放ちてゐる。あかるくさへた月光は地をらしてゐる。菊の花は人の命を長からしめるとの意。老いたる鶴はなほ千里をとぶ心があるといふ鶴の聲は高くなき渡り秋更にうけてきた。秋のふけ行くまゝに吹風も照る月もます／＼

草間に咲ける蘭は一國中の名花である。
清き秋にしたたる竹の露はふかいと云ふ意。

松清幽
間秋蘭
冬照竹
月深香
(元格)
(曹學佺)
(羌虬綠)

清松寒素
吟風窓雪
夜有夢曉掩秀
煮清不凝落孤月
茶音成華暉
松寒空
(塞文帝)
(顧愷之)
(太宗)
(蘇東坡)
(戴表元)

よき前兆である雪は程近く空に浮んでゐる。
山や峰が冬の月に染め出されて、一層寒く見える。
冬の山峯に一本松が青く秀て見えること。
寒く見える冬の雲が、夕日の影をとだしてゐる。
眞白に積つた雪が夜明方に花を咲かせたやうに見えること。
冬の寒き日窓の下に寝てゐるがなかへ眠られない。
松吹く風は謾としてきよらかな聲がある。

清らかな聲で夜る詩を詠じ茶を飲んでゐる。

冬寒日山
來巖晒鐘
幽一硯夜
の興樹池雪
長松冰時
(徐柱臣)
(張良)
(唐庚)

部

仁道厚忠竹柔
義德即柏弱
爲爲而無喻勝
準師廣二堅剛
繩友惠心貞強
(老子)
(孫子)
(子牙子)
(荀子)
(周書)

雜

仁道厚忠竹柔
義德即柏弱
爲爲而無喻勝
準師廣二堅剛
繩友惠心貞強
(老子)
(孫子)
(子牙子)
(荀子)
(周書)

柔能く剛を制するの意で、弱きものが却つて強者に勝ること。
竹や柏は年中青々として操を變へないで、堅固なる貞操に比べられる。
忠をよく守れば決して二心がない。
德化を厚く及ぼし、仁恵を廣くせねばならぬ。
人は常に道徳を以て師とたのみ、友とせねばならぬ。
仁と義とを己が處世の規則となすこと。

學 簡 潔 清 知 安
 君 簡 潔 清 知 安
 藉 稱 萬 善
 芳 萬 善
 草 壽 資 百
 鑑 資 百
 清 福 福
 流 福 (傳玄)
 (孫綽)

六字書の部

足 善
 己 心 善
 慎 足 善
 道 慎 足 善
 則 是 以 養
 等 作 以 養
 愛 天 家 自 德
 天 家 心 寡 德
 人 地 風 豪 性
 地 風 豪 性
 (劉泉錫)

善事に安んじて德性を養ふことにつとめる。

足ることを知つて其他を求むることを認めとせよ。

人は心を清淨にして慾を少くせなければならぬ。

自分を清廉にして欲を少くする人こそ、心豪といふべきである。

君の御恩の廣大無邊なることは、天地と同じである。

人間の踏み行ふべき道を學べば人を愛するやうになる。行ふべき道を學べば人を愛するやうになる。

簡略と儉約とを以て、我家の風としてある。

長生を喜んで多くの幸福を持つ意義。

芳草を以て坐布團にし清き水に對して鏡とする。

百花に先きんする梅花を見て能く春を知られる。

草も木も榮へて天下が春となつた。

壽命は萬年も長く幸福は百代も續くこと。

春ののどかな風には喜びの氣分があひ隨ふものである。

林の中の鶴は雲をなびて還つて来る。

園の梅花を先づ開いて春をなしたこと。

座敷中に満ちくたる佳氣、時は正に春である意。

青々たる山に對し綠なす清水によつて春をもてあそぶ意。

人は花の美しく咲く所によつて春を面白く遊ぶ。

桃花の紅き霞の蒸し立つ様に見えるのは多くの桃花の氣が立ち上るからである。

徐 人 と 對 満 梅 林 和 壽 草 梅
 引 蒸 從 青 堂 開 間 風 萬 木 花
 夏 千 山 佳 上 鶴 喜 年 榮 偏
 清 樹 裏 依 氣 苑 帶 氣 祚 天 能
 風 蘭 遊 先 雲 相 百 下 識
 納 紅 緑 陽 先 雲 相 百 下 識
 涼 桃 春 水 春 春 還 隨 世 春 春
 (戴廷煥) (沈石田) (林佶) (曾梅軒)

素ぞ麗^{けい} 扇^{せう} 冷^{れい} 月^{つき} 秋^{じゅ} 曉^あ 紅^{こう} 明^{めい} 寒^{かん} 風^{ふう}
雪^{ゆき} 柱^{じゆ} 高^{たか} 露^ろ 團^{だん} 氣^き 霜^{そう} 荷^か 月^{げつ} 暑^{しょ} 月^{げつ}
紛^{ふん} 樹^{じゅ} 冬^{とう} 風^{かぜ} 滴^{たまり} 丹^{たん} 和^わ 楓^{ふじ} 一^{いつ} 照^{てらし} 均^{ひんしく} 相^{あひ}
々^{おとこ} 之^の 以^も 而^て 柱^{じゆ} 商^{しょう} 葉^は 點^{てん} 白^{しら} 蟠^{はん} 和^わ
鶴^{づる} 冬^{とう} 革^{かわ} 朝^{あさ} 香^{こう} 聲^{せい} 秋^{あき} 清^{きよ} 雲^{うん} 魄^{はく} 寂^{せい}
委^{したがふ} 榮^{えい} 凝^{こご} 時^{とき} 調^と 耐^{たまなはなり} 風^{ふう} 籠^{くわらし} 圓^{まろし} 寥^{じやく}
(謝禮遇) (劉長卿)
部 (宋伯仁) (葉子壽) (寒山) (歐陽詹)
(李仲訓) (唐書) (楚辭)

桂樹の冬の寒さにも耐ます青々としてゐるの
はうるはしい。
真白な雪は紛々として降り來り鶴はつきした
がふ。

高い所の風をあふぎて誠に涼しい。

月明るく囁き時丹桂は花咲いて香はしい。

秋の氣が和して商の音律がよく調ふてゐる。

夜明の霜の爲に楓は赤うなつて秋も深い。

一木の赤色の蓮花二青色の風が火、火、火

寒暑の別なく常に同じ

吹風は照る月と和して甚ださびしい感じがある。

望挿微
月商霜
樓氣慘
高以而
太清夕
清溫結

（湛方生）

臨仰微詠
野庭風高池晴涼窓
水槐閒梧雲簷暑欹
一看而坐賦錦鵠氣枕
浮嘯古修清林潛義
雲風松竹閑鳩消皇

（王敬美）
（王中）
（王僧孺）
（王昌遠）
（文文山）
（貢性之）
（李繩遠）

秋の部

北向の窓の下で午睡すると、太古義皇時代の氣分がする。

樹の木蔭をすゝしくて夏の暑さもきえさる。
雨が晴れて、簷にはかさゝぎ、林には鳩が鳴いてゐる。
池一面にうつる朝靄は清くもあり閑でもある。
たけ高き梧桐を詠し修竹を賦して暑を忘れる。

庭の槐の木を仰いで風にうそぶいてゐる。

が野原の川を隠して浮雲のうつむか無心にな
がめてゐる

少しの霜はさびしげに夕方に結んでゐる。

秋の氣を挿んで清くあたたかである。

THE JOURNAL OF CLIMATE

春の部

七字書

雲閑點德君謹靜皇遵
林情筆感則言不恩節
野時翻人敬行自儉
思付書風臣正動抱尙
幽醉夕動則威靡丹素
夢遊暉物忠儀違心撲
(張衡)
(王應麟)
(吳融)
(新席)

(汪文桂)
(張秦階)
(鄭相如)

節儉を自ら行ひ質素を主として徳を行ふこと。
君主の恩に感じて自ら之に報いんと赤心を持つてゐること。
静にしても一方にかたよらず、動いても違ることなき意。
言葉や行ひをつしんで、行儀作法を正しくする意。
君主が敬を以て臣に對すれば臣は忠義を以て君に仕へる意。
善行は人を感ぜしめ風教は物を感化せしめる。
筆を執つて字を書くとそこに夕日が照る意。
世俗にはなれたる時初めて酒に酔ひ遊ぶ時である。
雲か林野にかゝり浮世離して夢まで静かである。

君聽治直
道貴天言
義聰盛
臣當禮
道無言
忠貴恭
(老子)
(呂氏)
(鬼谷子)

夜對雪月冰
靜燈蓬落架
寒獨落烏浦
巖書守月啼
虎生窩半夜封
嘯宵寒條
(李喬)
(陳晋)
(凌樹屏)
(沈學子)
(李邑)
(屠隆)
(張母祖)

雜部

氷は浦にはりつめ、雪は枝に積つてゐる。
冬の月は沈み鳥はがあくとなき、夜は寒い雪の夜遙窓の半を落月が照してゐる。

獨りさびしげに一燈に向つて冬のさびしき夜を送る。さむき部屋で雪をながめて酒を飲む意。

夜の物静かなる寒氣は書物を置く榻に生じる夜の物静かな時に虎は大岩の上にほへてゐる。

たゞしき言葉は盛にして禮に基く言葉はうやくしきがよい。
天下を治むるには公平無私でなければならぬ。
聞くことはときを尙び、智識は明なる事を尙ふ意。
君たるものい臠む道は義で臣たるものい臠む道は忠である。

野潤青梧
 草水叢竹
 幽松花風
 花風盡清
 各伴蝶六
 自獨來月
 香吟稀寒
 部
 (異量奎)

半滿一壽麗蓬四
 峰堂瓢山日山海
 夏花和春樹初樓人
 雨氣酒色明閣民
 の一生籠瑞五頌
 聲嘉篇佳氣雲太
 祥詩氣開深平
 (司空曙)
 (張果)
 (張憲)
 (揚允孚)

天下中の人民をこの太平の世を願してゐる。
 蓬萊山の棲閣には春がたゞようて五色の雲が
 立てこめてゐる。春のうららかな口が初めて照り目出度き氣
 分が發してゐる。春山の樹の色までが、目出度い氣分をこめて
 ある。春は何れの國にもおとづれて来て色々の花は
 つ多くの草花を千々に咲き亂れて世は皆春とな
 つた。梧桐や竹に吹く風は、誠に涼しくて寒う感じ
 る。背き草むらに花がなくなり、蝶の飛び来るこ
 とも少くなつた。谷川の流水の音、松吹く風の聲何れも獨り吟
 すに伴うのである。野邊の草に夏の幽花何れも得意だけに香ばし

萬萬天一鶯寒花春朝春淑風
 紫國地枝邊色得日野照氣吹
 千春無梅日凝東皇俱青依桃
 紅風私動暖春風家歡山遲李
 總百春己如送瑞薦柳籠一
 是花又催人壽夜氣壽色園
 春舞歸春語杯開遲新花青香
 (張說)
 (韓琦)
 (王操)
 (唐庚)
 (章碣)
 (上官儀)
 (張說)
 (韓琦)
 (王操)
 (唐庚)
 (上官儀)

春風は桃や李を吹いて花を咲かせ園一面にに
 ほはせる。李を吹いて花を咲かせ園一面にに
 春色かたいよい風はなよくと吹いて柳の色
 てある。青山を照してあるが未だ雪をこめ
 朝廷も臣民も共に聖春の萬歳を祝してゐる。
 春になつて青山を照してあるが未だ雪をこめ
 てある。青山を照してあるが未だ雪をこめ
 春になつて青山を照してあるが未だ雪をこめ
 てある。春日うららかにしてすいきは皇宮に満々とし
 て日の暮れるのが遅い。春日うららかにしてすいきは皇宮に満々とし
 多くの花は春風に吹かれて一夜の中に聞く。
 松などは寒色で春をこらし祝杯を送つてゐる。
 春のなくあたりは日か誠に暖くしてその聲も
 人か語るやうに思はれる。春のなくあたりは日か誠に暖くしてその聲も
 一枝の梅に二三の花が咲いて最早春を備して
 天地を公平無私だから春は時をまちがへない
 ある意。春は何れの國にもおとづれて来て色々の花は
 咲き亂れる。春は何れの國にもおとづれて来て色々の花は
 咲き亂れる。春は何れの國にもおとづれて来て色々の花は
 咲き亂れる。春は何れの國にもおとづれて来て色々の花は

かれてである。
秋の最中の月は鏡をかけたように五色の雲と共に出了と云ふ意。
桂花秋の最中に美しく咲いて月の影までが香つてゐる。
白鶴の一聲によつて天地の秋が知られる。
窓に照り込む秋の月で竹は一層元氣よく見える。
十月に書を見ると雪が螢に替るとの意。
夕暮に多くの山を通り過ぐると積雪の爲に寒さを感じる。

水のほとり山のかげ何れも夏の興を引くこと
が深い
一本の蓮の花の爲に座敷中が香しく匂つてあ
る。青葉深くて自分ながら家の涼しいのに嬉ぶ
風静に書窓に月光が一杯に満ちてゐる。
樹木の陰の庭院は夕暮に珠に涼氣を覺える。
うちには何人にも愛せられて夏の日あしはな
か／＼ながい
竹深き所の書齋で兒童に詩を作らせてある。
蘭に花咲き菊に花開いて芳を放ちてゐる。
赤き本の葉に黄い菊花咲き亂れ秋の景色はよ
し。
桐の葉そよ／＼と吹く風は涼しいが、それは
夜になる時である。蘭は静な杯中にありても亦自然の香を放ちて
ゐる。

一
明
與
陰
愛
敬
君
勇
默
固
禮
謹
二
寸
其
人
德
君
讓
子
敢
得
其
忠
者
言
一
赤
舊
交
自
山
則
履
也
其
忠
以
仁
而
二
心
而
外
然
岳
不
信
者
時
以
明
之
憤
貌
於
也
行
一
惟
知
淡
宜
心
競
無
義
則
其
貌
於
也
行
一
報
其
中
有
不
於
不
之
保
身
信
（忠經）
國
新
堅
慶
移
物
居
決
（馮用之）
（劉邵）
（班彪）
（蘇軾）
（李白）
（白樂天）
（趙師民）
（船記）

言ふことも謹んで其行ふことにも注意を拂ふといふ意。人の禮儀のつくした極は仁の外にあらはれたものである。其忠を堅くして其信を明らかにすること。物静かで過言でなければよくその身をたもつてある。ゆうきがあつて事をしとげる人は義によつて之を決するのである。君子と言はるゝ人は常にその他位を保つには信を行はねばならぬ。つゝしんで譲讓のとくを守れば則ち物とりあうことがない。君を愛すること山岳の如くすればその心は替らない。人知れず徳を施せば自然に幸福が来る意。人と交際するには外を淡泊で心の中は固くなければならん。古き事物を明らかにして初めてその新しさを知られるのである。すこしの赤誠は只だ國に報ゆるの心である。

徳君（蘇子美）
君子（張宛丘）
日子（楊誠齋）
新以（李調元）
萬成（蘇子美）
邦德（張宛丘）
惟爲（蘇子美）
懷行（張宛丘）
部（書經）

長山曉鶴銀閑銀五獨
夜窓雁唳樹日更守
如無連數長雖瑤聞殘
年月天聲開冬臺雁燈
筆寒烟六亦分滿理
硯燈叫靄出自外林斷
橫明霜中花長明（陸放翁）
（吳學禮）
（黃譖）
（秦船玉）
（武衍）
（易經）

獨り夜明けがたまで残燈を守もつて絲きれの
した書籍を整理する意、
夜明に雁のなき聲をきいて霜の林に満ちてゐ
るのを推察することが出来る。
きんの家玉のうてなの様に案外雪景色は明る
い。冬の短かき日でも閑暇なれば又長く感じる。
雪が積つて樹に銀の花がとこしへに咲いた様
に美しい、雪の積つた景色の形容。
鶴の二聲三聲はもやの中に鳴いた。
夜明の雁が遠く天に連り飛んで寒く霜中にさ
けんでゐる。
山中の家の窓には月光がささない爲一點の燈
火が大變あかるい。
冬の夜は年の如く長う思ふ、筆や硯は机に横
たわてゐる。
才學の高き君子は徳をなすことを以て自分の
行ひとしてゐる。
徳化が日々新になつて萬國が初めてよく歸服
するのである。

儉 則 可 以 傳
推 己 及 人 人 子
林 琴 山 花 水 鳥
影 心 詩 溪 光 趣
書 書 得 静 情 皆
編 開 得 是 静 相
靜 得 古 情 仙 會
得 古 神 自 仙 己
人 情 人 相 會 服
孫 一 方 孝 繼
(沈石川)
(戴叔倫)
(張南軒)
(孔平中)
(陳藻)

悅 其 志 意 一 養 其 壽 命 一
長 生 安 樂 富 貴 尊 榮
(唐樂章)
(淮南子)
(鬼谷子)

檢約を守る徳は永く子孫に傳ふべきである。
自分をなして仁恕を人に及ぼせば人心は必ず
心服する。而して仁恕を人に及ぼせば人心は必ず
山に咲く花水に遊ぶ鳥何れも知已である。
琴を彈すること詩を作る心は趣情と相會して
愉快である。詩を作る心は趣情と相會して
林の影に谷の色は静かで平素でよい。
讀書して其趣を得さへすれば、仙人である。
書物を開いて讀めば静かに古人の情に通する
ことが出来る。讀めば静かに古人の情に通する
ことが出来る。

その心を喜ばしめて其壽命を長からしめる。
北斗星は東に轉じて天下は皆春となつた。
皇位は極りなく聖壽は天地と共ににつきない意
めでたき日、めでたき雲、雨後の風月といふ
ことで、目出度き意。

やすらげくめでたきこと千萬年も變らぬ意味
壽命は山とともに齊しく永久に續き、幸福を
春の如く久しう續く意。
陶陽の正氣が調和して天地は皆春となつたこ
と。
螢は腐つた草からわいて風び出で、蟬は木の
枝にとまつて鳴いてゐる。風び出で、蟬は木の
水蓮の花は水に浮び、かたばみ藻はかぜにた
いよつてゐる。暑夏の火の櫻な風は戸を吹き、暑い氣は樓に
充満してゐる。暮の雲は夕暮に起つてふうけいはあしたに吹
く。

八字書の部

峰 炎 蓮 蟻 飛 花 汗 蟬
雲 扇 戶 蘭 暮 起 景 風 暑 氣 晨 扇
螢 草 蜂 水 蘭 暮 起 景 風 暑 氣 晨 扇
寶 祚 惟 永 噴 祥 雲 福 隨 春 至
瑞 日 安 祥 天 地 爲 命
保 和 祥 天 下 皆 春
壽 與 山 齊 福 千 秋 萬 春
乾 坤 正 氣 天 地 皆 春
(昭明太子)
(張南軒)
(高道素)
(鐘伯敬)

月落鳥啼風傳雁信一(蘇東坡)
白露橫江水光接天(蘇東坡)
大履長納慶亞歲迎祥(曹植)
夜結悲風霧添寒(昭明太子)
嚴霜極冷苦風自天
與民優游順降祉自天
祥風協和順降祉自天
煙虛靜響起壽萬年
香清白空明雪映(運行論)
一炷如春(雪溪僧)

月は西山に没した夜明、鳥は鳴き渡り風は雁
のあとづれを傳へる。向き鱗は江に横はつて水の光は遠く天に接し
てゐる様だ。

冬至となつて日出度よろこびを受けた。
厳しい霜は夜中に出来てさびしい風は夜間に
さへ起る。さびしき風は益々冷氣を加へ、冬の霧は愈々
寒さを添へてくる。

日出度い風をよくととのひ幸福は天よりたま
はる。

民と共に苦樂し萬年も永い壽命を受けやう。
夜の静けさをやぶつて響起り天は清く晴れて
月澄め渡つてゐる。

大空は清く白く、空は明らかで雪が映じてゐ
る。香をたくと部屋中は冬の春のやうな思ひする。

秋の部

荷 風 明 香 沫 露 松 影 和 風
香 竹 月 時 至 情 風 自 來
十 相 吞 草 木 一 鈎
里 新 月 木
自 馨
（司馬溫公）
（米元章）
（吳子和）

秋菊落英輔休延壽（文帝）
飛霜擢秀金菊凌霜（張昭）
曉露垂珠涼風送秋
高風送秋
山高月皎林樹潔露下梧桐（孟浩然）
星烟栖月皎水明在天（歐陽永叔）
高月皎林樹潔露下梧桐（孟浩然）
小河落石出

蓮の花の香は露にしめり松の影は風に和して
よい。明月は上り、きよき風は自ら吹いて来る。
風に吹かるゝ竹は互に重りあひ、草や木はお
のずからかなる。蓮の花は十里も續きで香氣を放ち三日月は鉤
をかけてゐる。

巧言雖美用之必滅（易經）

木以繩直君以諫明（書經）

君子之言信而有徵

信以行義義以成

朝夕勤恪守以惇篤

君子實如虛有如無

順道而行順理而言

節用以禮裕民以政

道德爲麗仁義爲準

道順以孝則天下順

依義顯君竭忠彰主

禮讓爲國仁義爲宅

逢時積德身受福慶

好行善者天助以福

十字書

春の部

青陽暢和氣谷風穆以溫

新鶯隱葉喚新燕向窓飛

林有鳴心鳥園多奪目花

青情寄柳色鳥語出梅中

寒辭去冬雪暖帶入春風

其の時代に逢うて善行善事を積むとその身に幸福祥慶がくる。柔かに吹いて世間は暖かとなつた。東風は初つ鶯は木葉のかげで囁り新しく來た燕は窓を目がけてとんでくる。山林には心になく鳥あり、園には目をうほうほど美しく花が咲いてゐる。春の思ひを傳の色に寄せ鳥の聲は梅の花咲く中から聞えて来る。冬の寒さも雪の消滅により暖氣は來つて春風が吹いてゐる。

笑樹花分色啼枝鳥合聲
落花開戶入啼鳥隔窓聞

(張謂)

柳枝經雨重松色帶烟深
花對池中影松搖風裏聲

(孟浩然)

江山增潤色詞賦動三陽春

(王維)

祥雲浮紫閣喜氣繞朱軒

(李岑)

宿雨松篁色新晴燕雀聲

(范石湖)

花然山色裏柳臥水聲中

(吳筠)

暖日黃金柳光風白玉梅

(宋之間)

鶯飛林外白蓮開水上紅
野舍時雨潤山雜夏雲多

(武帝)

水深魚極樂林茂鳥知歸
夏雲牽嶂遠瀑布引溪長

(吳筠)

日永一堂靜草生三徑深
早蟬鳴樹曲鮮鯉躍潭東

(司馬溫公)

啼鳥常終日幽花不減春
開軒對流水上坐石待薰風

(鄒韜)

落月斜筍柱流螢拂扇羅
（字文虛中）

（張羽）

樹といふ樹には花聞いて色々の色を現し鳥は枝上に鳴いて聲を合せてゐる。散る花は霏々として屋内にはいり、鳥の啼き聲は、窓越しにきこへる。

柳の枝は雨が止んでも尙重く垂れて松の色は雨後の煙をうけて尙綠こまやかである。花は池中に其影を映して松の搖れる音は風の中に聞えてくる。柳の枝は雨が止んでも尙重く垂れて松の色は雨後の煙をうけて尙綠こまやかである。花は池中に其影を映して松の搖れる音は風の中に聞えてくる。

柳の枝は雨が止んでも尙重く垂れて松の色は雨後の煙をうけて尙綠こまやかである。花は池中に其影を映して松の搖れる音は風の中に聞えてくる。柳の枝は雨が止んでも尙重く垂れて松の色は雨後の煙をうけて尙綠こまやかである。花は池中に其影を映して松の搖れる音は風の中に聞えてくる。

冬の部

涼夜如清水明河似白雲。
江上之清風山間之明月。
清楓林一葉下露草百虫鳴。
千里夢明月一聲砧。
（蘇東坡）
（徐致中）
（葛長庚）
（李彌遠）
（張解）

山靜竹生韻池清蘭自香
雲開千里月風動一天星。
火重酒暖未滅滅寒川。
照書燈平田暮雪空返照。

冬の部

大夜間は涼しくて清水の如くに感じ、天の川は
大空に流れて白雲と思はれる。川のほとりに吹く清き風、山の上に掛る明月
といふことで、秋夜の景色をいふ。楓の林には一葉が散りそめ、草の中ではいろ
いろの虫が鳴く頃となつた。清き風は千里の外までも夢を送り、月はさへ
て何所からか砧うつ音がする。山はもの静かで、竹に清き聲が生じ池水は清
くすんでらんがおのすからかんばしい。雲は散じて千里くまなく照らす月影が明らか
に、風は吹きうごかして空一面に多くの星がか
出てゐる。

山はもの静かで竹に溝き聲が生じ池水は清くすんでらんがおのすからかんばしい。夕日の影は川一面に充ちて廣き一面の耕地には暮の雪が已に消へた。

秋の部

秋の部

書就松根讀琴來石上彈
綠深栖鳥靜風定落花疎
雨聲涼入硯花氣潤侵簾
(易譜)
(申笏山)

白露滋園菊秋風落庭槐
月露月下圓秋風枝上鮮
白露滋園菊秋風落庭槐
白露月下圓秋風枝上鮮
露凝千片玉菊散一叢金
殘暑晝猶長早涼秋尙嫩
月鎖千門靜天高一笛清
籬聲新蟋蟀草影老蜻蜓

書はまつの根に腰かけて読み、ことは石の上
にすわつて弾く。樹林縁に茂つて栖む鳥も静かに風は止んで時々花が散つてゐる。

雨の降り聲を聞いても涼氣が硯まで入り込むやうに花の香は簾をとほすやうに思はれる。

吹き露は、花壇の肩にさかんにをき、秋風は吹いて庭の槐の葉を落した。

清き露は月に照らされて、白く珠の如く、秋風は枝上にあり／＼と見られる。

白き露は凝つて一つの玉のやうであり、菊が咲き亂れて一かたまりの黄金をちらしてゐる。残暑はきびしく晝はまだ長く早や涼しい秋風は吹くがまだ秋の初めである。

多くの家には月のさすのに戸を閉め、天は澄んで高く一聲の笛はすみてきこへる。

垣根には初めてきりぎりすの聲がし、草かけには、とんぼが力なげにとまつてゐる。

恭レ己每從レ儉清レ心常保レ眞

簡則不レ勞人儉則不レ費財

任智誠則短守仁固其優

學者所以學爲忠與孝也

研精而不倦覃思而惟深

居家以忍順保交以簡恭

奢者心常貧儉者心常富

讀得一尺不如行得一寸

學進則識進識進則量進

自身をうやしくしてつねに其まことの道を保つがよい

ものごとを手軽にすると人に骨折せず、儉

約すれば財をついいやすない。仁を守れば

仁を守れば固よりそれはゆうである。

智識にまかせて事なせばそれは誠に短であり

仁を守れば固よりそれはゆうである。

研究し精熟してうまない、あくまで思ひをこ

らして益々深くするのである。

家に居ては堅忍溫和で交際を持續するにも簡

にしてうやしくせねばならぬ。

やせいたくするものは心常にまづしく、つゝま

やかななるものは心常に富んでゐる。

一尺程読みうるはよいがそれよりも一尺行う

にこしたことはない。

学問が上達すると知識も進み、知識が進めば

——(終)——

不許複製

五體墨場必携版冊

定價金臺

昭和十年六月五日印刷
昭和十年六月十日發行

書者

史邑本辻

印 刷 者

善元淵大

發行所

大阪市南區東清水町二九

電話南一一五四二八〇七番
振替大阪一〇三五番

寧樂書道會長辻本史邑先生書

三体千字文（普及版）	絹表紙	定價二圓五十錢	美濃半裁 糊表紙	十四錢	上、下二冊 楷・行・草・並書
三体千字文（甲）（豪華版）	絹表紙	定價六圓	美濃全判 糊表紙	三十錢	楷・行・草・並書 上、下二冊 糊表紙
三体千字文（乙）（豪華版）	絹表紙	定價六圓	美濃全判 糊表紙	十四錢	楷・行・草・並書 三冊 糊表紙
五体千字文（豪華版）	絹表紙	定價二圓五十錢	美濃大判 糊表紙	十四錢	楷・行・草・並書 一頁三行・一行五字
楷書千字文（豪華版）	絹表紙	定價二圓	美濃全判 糊表紙	十四錢	楷・行・草・並書 一頁五行・一行十字
行書千字文（豪華版）	絹表紙	定價二圓	美濃全判 糊表紙	十四錢	楷・行・草・並書 一頁三行・一行五字
草書千字文（豪華版）	絹表紙	定價二圓	美濃全判 糊表紙	十四錢	楷・行・草・並書 書の大字手本
隸書千字文（豪華版）	絹表紙	定價二圓	美濃半裁 糊表紙	十四錢	楷・行・草・並書 一頁三行・一行五字
篆書千字文（豪華版）	絹表紙	定價二圓	美濃半裁 糊表紙	十四錢	楷・行・草・並書 書の大字手本

甲・乙の別あるものは御注文の際必ず甲か乙かを御指定下さい

寧樂書道會長辻本史邑先生書

國民習字教範（楷書篇）	和美濃長折手本	定價六十錢	美濃長折 和美濃手本	六送錢料
國民習字教範（行書篇）	和美濃長折手本	定價六十錢	美濃長折 和美濃手本	六送錢料
國民習字教範（草書篇）	和美濃長折手本	定價六十錢	美濃長折 和美濃手本	六送錢料
國民習字教範合本	和美濃長折手本	定價一百八十錢	美濃長折 和美濃手本	十四錢料

東方書道會審査員 高塚竹堂先生書

國民習字教範（假名篇）	美濃半裁 糊入美本	定價八十錢
	八送錢料	

本書は前期國民習字教範漢字篇の姉妹篇として、我が國假名書の大作家竹堂先生が、明治大帝の御製を色紙型に謹書したものである

●辻本先生は、我國教育書道界の權威として普く其名を知られたる大家である。
●高塚先生は、假名書の大家にして、文部省國定手本の筆者として著名である。

糧作精神の習字の精備

本

所行發

店書堂々駿

九二町水清東區南市阪大
番五三〇一阪大座口營振

所行發

九二町水清東區南市阪大
番五三〇一阪大座口營振

店書堂々駿

奈良県書道合理化
事務局

辻本九華先生書

楷書軌範	和紙手本 英濃長折	定價五十錢	六送錢料	一行三字書の大字にして
行書軌範	和紙手本 美濃長折	定價五十錢	六送錢料	一行一行にして
草書軌範	和紙手本 美濃長折	定價五十錢	六送錢料	一行三字書の大字
書道軌範	前記三冊 合本軌入	定價一圓五十錢	十四送錢料	注意!! 本は特に書道軌範合本と御記し下さい

書道入門の第一階梯は、基本(運筆用筆結構)を確實に習得しなければならないものだ、本書は各篇とも、運筆用筆の基本、結構法の基本を系統的に配列し、更に既習の基本を練習せんが爲に練習文字を挿入したものである。

辻本九華先生書

硬三体手紙用語手本

和紙手本
判別全一冊
和紙箱入り

定價一圓十送錢料

店書堂々駕

九二町水前東區市阪大
番五三〇一阪大座口營業

所行發

終